

手順を説明する談話における本題の会話と雑談の特徴

— 修辞機能と脱文脈度の観点から —

田中弥生 (人間文化研究機構 国立国語研究所)

1. はじめに

日常会話では、いわゆるおしゃべりなどの雑談や、相手に何かを依頼したり、謝罪したり、説明したりという目的をもった談話が様々なレベルで行われている。また、それらの談話の分析の観点は終助詞などの語句レベルから談話構造などさまざまである。本発表は、手順を説明するという目的をもった談話における、手順説明という本題とそれ以外の部分の両方を対象として、修辞機能と脱文脈度の観点から分析を行う。ここでの修辞はいわゆる技巧などではなく、「話し手・書き手が発信する際に、言及する対象である事態や事物、人物等を捉え表現する様態を分類し、概念化したもの」を修辞機能と定義する。また、本研究では「いま・ここ・わたし」を文脈と考へ、「コミュニケーションが行われている時空とその発話内容との時間的・空間的距離の程度」を脱文脈度とする。子供の発達や学校教育の分野で「脱文脈化」は議論されている。幼児は自分や身の回りのことから、成長に伴って、過去や未来、その場にいらない人やものごとという時間的・空間的に離れたことについて述べられるようになる。餅つきをした経験を作文に書く際、「今日僕は餅つきをしました」と書くより、「新宿町会では、毎年12月28日に餅つきをします」と書く方が脱文脈度が高い。

目的をもった談話については、例えば相談や勧誘などの分析が行われている(ザトラウスキー 1993, 鈴木 2002)。雑談は、雑談主体のもの(筒井 2012)や、話し合いなど本題の中で生じる雑談の研究がある(村田 2016)。村田(2016)はHolmes(2000)を援用し、雑談を「話し合いの本題から逸脱した話題で対人関係をもつ談話」と定義している(村田 2016:55)。また、職場のミーティングの談話における雑談についてHolmes(2000)は、Core business talk, Work related talk, Social talk, Phatic communionのうち、Social talkとPhatic communionをSmall talk(雑談)としたのに対し、村田(2016)は、「その談話の持つ機能によっては本題に関連する話題も雑談に含む」(村田 2016:55)としている。

修辞機能と脱文脈化の観点からの談話分析では、認知機能の活性化を考慮して設計された共想法という手法による高齢者グループの談話の分析(田中ほか 2022)や打ち合わせ談話における談話構造の分析(田中 2022a)、児童作文の分析(田中ほか 2021)などでは、テーマや学年、独話・会話の別によって特徴があることが明らかになっている。

本研究は、日常会話における修辞機能と脱文脈度の観点からの談話分析の有用性を確認する研究の一環で、目的のある談話における本題とそれ以外の会話の特徴を修辞機能と脱文脈度の観点から明らかにすることを目的とする。分析には「爪磨きのレッスン」の談話を使用する。目的をもった談話の中でも、目の前の作業の手順を説明する談話では「これをこうする」のような発話が多いことが予測される。すなわち仮説として、具体的な手順を説明する場面では、発話が生じている「いま・ここ・わたし」に最も近い、脱文脈度の低い表現が用いられることが予想され、本題以外では特定の脱文脈度に偏ることは予測されない。本研究では、まず①爪磨きレッスンの談話における「本題の会話」と「雑談」の分類を検討し、その上で、②本題の会話とそれ以外における修辞機能の分析から、脱文脈度の特徴を確認する。

2. 分析対象

『日本語日常会話コーパス』(小磯ほか 2022)に収録されている爪磨きレッスンの談話(K011_005)を分析対象とする。会話参加者は女性2名(川原、内海、いずれも仮名)で、共有の友人を通じて知り合い、今回が初対面である。談話の目的は、爪磨きの手順を説明し指導すること¹、その場所としてカラオケボックスを使用している。全体で1時間4分のデータのうち、概説²の後の具体的な手順の説明が始まる12分07秒から最後までを使用する。

3. 分析方法

¹ 川原が副業として販売している爪磨きキットの使い方を説明するレッスンである。

² 概説部分については田中ほか(2020)にて修辞機能の報告をしている。

3.1. 分析方法 1

爪磨きレッスンの談話には爪磨きの手順という本題の部分とそれ以外の内容が含まれる。村田(2016)を援用し、本研究のデータにおける本題とそれ以外の分類を検討する。

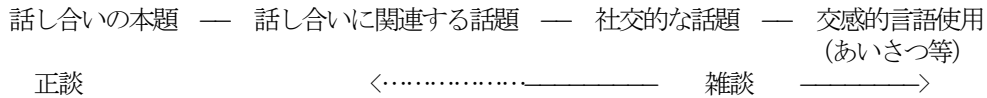


図1.雑談の定義(村田 2016:55)

3.2. 分析方法 2

修辞機能と脱文脈度の確認には、修辞機能分析(田中 2022b)の分類法を用いる。修辞機能分析は、修辞ユニット分析(佐野 2010, 佐野小磯 2011)³をもとに、日本語文法の枠組みによって修正された分類法で、手順は、次のとおりである。

1. 分析単位(メッセージ)に分割し、分析対象を特定する。
2. 発話機能・時間要素・空間要素を分類し、その組み合わせから修辞機能と脱文脈度を特定する。

3.2.1. 分析対象の特定

分析単位メッセージは概ね日本語文法の節に相当する⁴。「主節」(単文と主節)、「並列」(主節以外で節の順番を変更することが可能な並列節, 従属度の低い従属節)、「従属」(従属度の高い従属節)、「引用」(“と思う”などで引用されている部分)、「定型句類」(相槌や定型句, 挨拶, 述部がなく復元が困難なものなど)に分類する⁵。

3.2.2. 発話機能・時間要素・空間要素の認定と、修辞機能・脱文脈度の特定

「主節」「並列」「引用」に認定されたメッセージについて、発話

機能・時間要素・空間要素を分類し、表1によってそれらの組み合わせから修辞機能と脱文脈度⁶を特定する。発話機能は発話内容が同じ時空にいる相手への行為や物の要求や提供の場合に「提言」、情報の要求や提供の場合に「命題」とする。時間要素は「いま」からの時間的距離で、述部の時制や副詞から、現在・過去・未来意志的・未来非意志的・仮定・習慣恒久に分類する。空間要素は「ここ・わたし」からの空間的距離で、述部の主体や主題から、参加・状況内・状況外・定義のいずれかに分類する。いま・ここ・わたしに近い修辞機能【行動】の脱文脈度が[1]で最も低く、時空に依存しない【一般化】[14]が最も高い。分類例を示す。

表 1. 修辞機能と脱文脈度の特定

定義	↑ 高 ↓ 空間的距離のレベル ↓ 低						一般化 14
状況外	報告 9	状況外回想 10	予測 11		推量 12	説明 13	
状況内	実況 2	状況内回想 3	状況内予想 5		状況内推測 6	観測 8	
参加			行動 1	計画 4			自己記述 7
空間要素	← 低 ← 時間的距離のレベル → 高						
時間要素		現在	過去	未来意志的	未来非意志的	仮定	習慣・恒久
発話機能	提言	命題					

- (1) 川原 こうやって。 提言⁷ → 【行動】 [1]
川原 固定をしっかりして。 提言 → 【行動】 [1]
- (2) 川原 じゃあちょっと仕上げをしますね。
命題&現在(仕上げをします) &参加(φ⁸=私は) → 【実況】 [2]
- (3) 川原 いろんなカラオケボックスに行ってますけど:。
命題&習慣・恒久(行ってます) &参加(φ=私は) → 【自己記述】 [7]
比較的綺麗。
命題&習慣・恒久(比較的綺麗) &状況外(φ=# # # # #⁹は) → 【説明】 [13]
- (4) 川原 ささくれとかできてるんだけど:。
命題&習慣・恒久(できてるんだけど) &状況内(ささくれとか) → 【観測】 [8]

³ 修辞ユニット分析は選択体系機能言語理論の枠組でCloran(1995,1999)によって提案された英語分析手法を日本語に適用したものである。

⁴ 連体修飾節は独立したメッセージとして扱わない。

⁵ 村田(2016)の「交感的言語使用」は本研究では「定型句類」に分類される。

⁶ 順序尺度である。

⁷ 発話機能が提言の場合は、修辞機能【行動】脱文脈度[1]が特定され、その後の分類は不要である。

⁸ 省略されている要素をφで示す。

- (5) 川原 爪って十日で一ミリ伸びるから:
命題&習慣・恒久 (十日で一ミリ伸びる) &状況外 (爪って) → 【説明】 [13]
- (6) 川原 であとは: このバッファーで磨く時は:往復しない.
命題&習慣・恒久 (往復しない) &状況外 (φ=バッファーは) → 【説明】 [13]

4. 分析結果

4.1. 本題の会話と雑談の分類

本研究の分析対象データでは、爪磨きの手順を説明する明確な「本題」のほか、その手順や爪、使用するキットなどに関連する話題があり、また、本題とは関係のない話題も含まれていた。本題か本題ではないかの2つには分類できず、分析対象データから抽出した分類項目¹⁰とその例を表2に示す。

表 2. 本題とそれ以外の分類及び例

分類 (分類の基準)	例 (K011_005 より)
a 本題 (具体的な手順を述べている発話)	川原 こうゆう感じで持って. ここに当てて.:
b 本題に関連する話題 (爪磨きにかかわるが, 具体的手順ではないもの)	川原 爪って十日で一ミリ伸びるから:
c 本題に関連する個人の話題 (会話参加者の爪磨きにかかわる個人的な話題)	川原 そんなに伸びてないから: そんなには削らないと思うんですけど.
d 本題に関連する第三者の話題 (会話参加者以外の爪磨きにかかわる話題)	川原 ほんとはぼろぼろの人もいます.
e その場の話題 (爪磨きには関係のないその場での話題)	川原 いろんなカラオケボックスに行ってますけど: 比較的綺麗.
f 個人の話題 (会話参加者の爪磨きには関係のない個人的な話題)	内海 極力し ¹¹ , 運転したくないし: 川原 本当: もう極力車で出掛けたい.
g 第三者の話題 (会話参加者以外の爪磨きには関係のない話題)	川原 保育士さんも大変だよ.

村田(2012)による雑談の定義「話し合いの本題から逸脱した話題で対人関係をもつ談話」によって雑談を検討する場合、a. 本題以外をすべて雑談とするか、少なくとも爪の話である b, c, d についても、本題から逸脱はしていないため本題に含め、それ以外を雑談とするか、検討が必要である。

4.2. 修辞機能と脱文脈度

4.1 で示した本題等の分類ごとの修辞機能の出現状況を表3に示す¹²。

表 3. 本題等の分類別 修辞機能の出現頻度

	行動 [1]	実況 [2]	状況内 回想 [3]	計画 [4]	状況内 予想 [5]	状況内 推測 [6]	自己 記述 [7]	観測 [8]	報告 [9]	状況外 回想 [10]	予測 [11]	推量 [12]	説明 [13]	一般化 [14]	計
a 本題	15	82	0	2	3	0	17	47	4	0	0	0	49	0	219
b 本題に関連する話題	2	16	2	0	7	0	19	38	1	0	1	0	36	3	125
c 本題に関連する個人の話題	0	20	11	3	5	0	47	32	1	3	0	0	26	0	148
d 本題に関連する第三者の話題	0	0	0	1	0	0	4	6	0	4	0	0	15	0	30
e その場の話題	0	6	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	3	0	14
f 個人の話題	1	0	8	1	0	0	26	2	0	7	0	0	31	0	76
g 第三者の話題	6	1	0	2	0	0	6	1	0	1	1	0	62	0	80
計	24	125	21	9	15	0	121	129	6	15	2	0	222	3	692

本題等の分類と修辞機能との関係を調べるために、多重対応分析を行った¹³。分析にはRのmca関数を用いた。表3と図2から本題等の分類と修辞機能の出現の特徴について次のことがわかる。

- 本題と【実況】[2]、本題に関連する話題と【観測】[8]、本題に関連する個人的な話題と【状況内予想】[5]及び【自己記述】[7]が共起しやすい。

⁹ カラオケ店の店名。

¹⁰ 分類項目のアノテーションは2名で行い、カッパ係数を求めたところ、 $\kappa=0.88$ とほぼ一致していることが確認された。

¹¹ 原文ママ。

¹² アノテーションは2名で行い、カッパ係数を求めたところ、 $\kappa=0.81$ とほぼ一致していることが確認された。

¹³ 出現頻度が10以下でほとんど出現しない修辞機能は除外した。本題等の分類はb.本題関連 c.本題-個人などのように省略している。

- 【説明】 [13]は本題でもそれ以外でも見られる。
- 【状況外回想】 [10]は個人の話題で見られる。
- 個人の話題は、本題に関連しているか否かに関わらず【自己記述】 [7]と共起しやすい。

5. 考察

本研究の分析対象は対面で手順を説明する場面のため、【行動】 [1] 【実況】 [2]が本題で用いられることが予測されていたが、同じ時空で手順を説明する場合でも、その場に依存しない【説明】 [13]も用いられることが明らかになった。

本研究で確認した修辞機能と脱文脈度の結果から本題と雑談の区分を検討することが可能だろう。 a. 本題と b. 本題に関する話題、 c. 本題に関連する個人の話題の修辞機能の出現状況は、 a. 本題に特徴的な【実況】 [2]と c. 本題に関連する個人の話題に特徴的な【自己記述】 [7]以外では、傾向が似ていると考えられるため、a, b, cを「本題の会話」とすることができるのではないかと考える。一方、修辞機能の出現傾向が a.

本題とは異なる d. 本題に関連する第三者の話題、 e. その場の話題、 f. 個人の話題、 g. 第三者の話題については、「雑談」と呼ぶことができるかもしれない。これらでは、脱文脈度の低い修辞機能は見られず、【説明】 [13]の割合が高い。

6. まとめと今後の課題

本発表は、目的のある談話における、本題とそれ以外の会話の特徴を修辞機能と脱文脈度の観点から明らかにすることを目的とした。発話内容から本題とそれ以外の複数の分類項目を抽出した上で、修辞機能分析の分類法によって特定した修辞機能と脱文脈度について、クロス表と多重対応分析によってその特徴を検討した。その結果、爪磨きの手順を説明する、本題の会話に特徴的な修辞機能があることがわかった。また、本題以外の発話でも、本題に関連があると分類されたものでは、本題と似た傾向の修辞機能の特徴が見られることがわかった。一方、本題とは異なる傾向が見られたものについて雑談と呼ぶのであれば、本題に比較して【説明】 [13]の割合が高いという特徴が見られた。雑談の特徴として【説明】 [13]の割合が高いといえるのか、本研究のように本題が脱文脈度の低い【実況】 [2]を特徴とする談話である場合の雑談にのみこの傾向が見られるのかについては、今後の課題としたい。

謝辞 本研究は国立国語研究所のプロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」によるものです。また、SPS 科研費 JP18KT0035, JP19K00588, JP20H01674 の助成を受けたものです。

参考文献

- Carmel Cloran (1995). Defining and Relating Text Segments. In Hasan, R. and Peter H. Fries eds. *On Subject and Theme: A Discourse Functional Perspective*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. pp. 361-404.
- Carmel Cloran (1999). Context, material situation and text. In Mohsen Ghadessy eds. *Text and Context in Functional Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. pp. 177-217.
- Holmes, J. (2014). Doing collegiality and keeping control at work: small talk in government departments. In J. Coupland (ed.) *Small talk*. London: Longman. pp. 32-61.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2022). 『日本語日常会話コーパス』の設計と特徴 言語処理学会第28回年次大会発表論文集, 2008-2012.
- 村田和代 (2016). まちづくりの話し合いを支える雑談 村田和代・井出里咲子(編) 雑談の美学 言語研究からの再考 ひつじ書房 pp. 51-70.
- 佐野大樹 (2010) 日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver. 0. 1. 1: 選択体系機能言語理論 (システム理論) における談話分析 (修辞機能編) <https://researchmap.jp/kotonoha/資料公開/>.
- 佐野大樹・小磯花絵 (2011). 現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証- 「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係- 機能言語学研究, 6, pp. 59-81.
- 鈴木香子 (2002). ラジオの医療相談の談話の構造分析 早稲田大学日本語教育研究, 1, pp. 117-130.
- ザトウスキーポリー (1993). 日本語の談話の構造分析: 勧誘のストラテジーの考察 くろしお出版, 東京.
- 田中弥生 (2022a). 打ち合わせにおける談話構造の修辞機能からの分析 言語資源ワークショップ 2022.
- 田中弥生 (2022b). 修辞機能と脱文脈化の観点からの日本語談話分析 東京大学大学院総合文化研究科 博士論文
- 田中弥生・浅原正幸・小磯花絵 (2020). 手帳説明談話における脱文脈化の諸相 言語処理学会第26回年次大会発表論文集, pp. 720-723.
- 田中弥生・小磯花絵・大武美保子 (2022). 脱文脈化の観点から見た共想法に基づく高齢者談話の分析 国立国語研究所論集, 22, pp. 137-155.
- 田中弥生・佐尾ちとせ・宮城信 (2021). 児童作文の評価に向けた脱文脈化観点からの検討 言語処理学会 第27回年次大会 発表論文集, pp. 750-755
- 筒井佐代 (2012). 雑談の構造分析 くろしお出版, 東京.

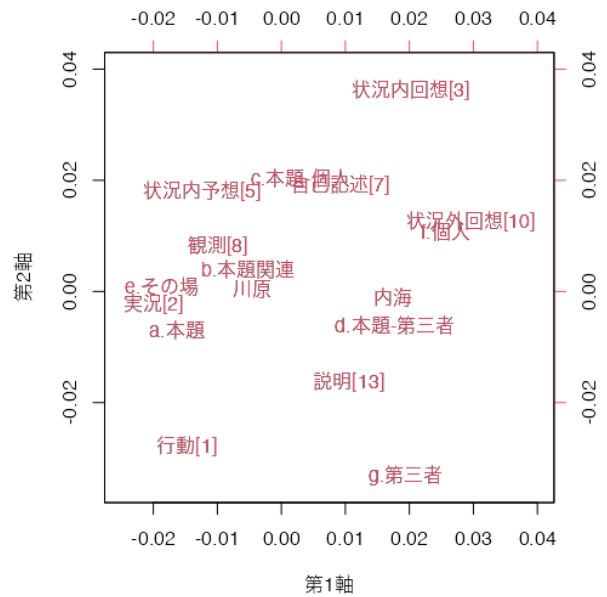


図 2. 本題等の分類と修辞機能の多重対応分析結果